

常任委員会視察報告

去る、9月5日、6日に行いました、総務委員会、産業建設委員会、教育民生委員会の合同視察について報告いたします。

今年度は、産業建設委員会が主催となり、国の補助金に頼らない地方創生モデルとして注目されている、岩手県紫波町の公民連携による紫波中央駅前都市整備事業、オガールプロジェクトを視察して参りました。

オガールプロジェクトを進める、岩手県紫波町は、県都盛岡市と花巻市の間に位置する人口3万4千人、面積239k㎡、農業を基幹産業とする町です。

人口減少時代にあつて、岩手県内では、数少ない人口をほぼ横ばいに維持する町であり、住民の多くが、盛岡市、花巻市、北上市などへ通勤していることなどから、昼間人口割合は約85%となっています。

今回の視察の目的は、紫波中央駅前に広がる開発事業の取り組みを現地で学び、今後の議員活動の糧にするものでございましたが、町長も紫波町のまちづくりを是非参考にしたいということで同行されたところです。

紫波中央駅前開発計画の面積は、21.2haであり、この開発地には現在、図書館、子育て応援センター、産直マルシェ、飲食店などがある「オガールプラザ」と、ホテル、バレーボール専用体育館を備える「オガールベース」、町役場、さらには、現在57戸が建設されている住宅区「オガールタウン」があります。

商業施設や図書館があるオガールプラザ、宿泊施設のあるオガールベースなどには、年間80万人を超える方が訪れ、また、視察される団体も非常に多く、その数は、現在延べ600を超えるということです。

オガールプロジェクトは2009年に策定された紫波町公民連携基本計画に基づき、公有地活用型、いわゆるパブリック・プライベート・パートナーシップ PPP手法を採用しています。

公民連携の場合、公共は補助金などを活用し住民福祉向上のためなど施設を造り、民間はその施設を運用して利益をあげることとなりますが、経営的な視線を十分取り入れた計画ではないため、民間の投資が続かず、結果的に使われない施設などが多くなり、大きな赤字を抱える自治体も少なくないのが実情です。

オガールプロジェクトの特徴は、補助金などの公的資金に頼ることなく、民間金融機関の厳しいチェックが継続的に入る体制作りを構築していることです。

また、施設の竣工も入居率が100%にならないと行わないなど、徹底したリスク回避の考え方をもち事業を展開しています。この運営方針は、金融機関との信頼関係をさらに強めることとなり、その結果多額の融資も可能にしております。

このような運営方針やその手法は、先進事例として大変参考となりました。さらに運営手法等と併せてこのプロジェクトのベースにはまちづくりのビジョンがあることについても説明をいただき、その考え方、取り組み方も非常に参考となったところです。

紫波町では、まちづくりのビジョンとして循環型まちづくりを掲げており、2001年に「紫波町循環型まちづくり条例」が制定されています。「循環型まちづくり」とは、一つ

は、有機資源の循環。これは、農業を基幹産業とする紫波町の元気な土づくり、地産地消の推進です。二つめは森林資源の循環です。町産の木材を利用した公共施設、住宅などの建設。三つ目は無機資源の循環。これは焼却ごみの削減などです。この理念は現在、経済の循環、人の交流の循環、匠の技などの世代の循環と、まちづくりの基本理念として広がっています。

実際に「オガールプラザ」、「オガールベース」には町内産の木材が利用されており、施工は地元業者で全て対応しているとのこと。オガールタウンに建設される家屋には、町産木材のチップを利用した暖房、給湯システムが採用されています。

また、施設内の「産直マルシェ」の企画・運営には、住民が深く関わるなど、地産地消の考えが地域に浸透していることが感じられました。ちなみに紫波町には、既に9箇所の産直施設があり、オガールプラザには産直以外の施設を検討していましたが、住民の意見によりプラザ内に町内10箇所目となる「産直マルシェ」ができたとのこと。あり、視察時にも大変多くの方が買い物に訪れており、活気に溢れておりました。

プラザ内の図書館も単に本を貸すのではなくや基幹産業の農業をバックアップする多くの情報や施設内に貸しスタジオがあることから楽譜を揃えるなど、本を借りる理由を考えた図書の選定になっており、繰り返し本を読むことへの動機付けのための工夫がされておりました。更には、開発地内には太陽光を利用した大規模なエネルギーステーションもあるなど、全施設を通じ循環型が具現化されておりました。

オガールプロジェクトは、民間の融資を基に、厳しく審査された経営方針により、集客率を高め、そこから得る収益からの税収が施設の維持管理費に充てられることから、実質的に町負担が無く、収益を生める公共施設として運営されています。これも循環型といえるのではないのでしょうか。

まちづくりのビジョンの体現化がオガールプロジェクトであり、その結果が、単にものを売る施設ではなく、住民からも、またそこを訪れる方からも本当の意味で使われ、喜ばれ、町を思い、愛される施設となる。これも循環のストーリーができています。

しかし、このようなストーリーも一朝一夕に実現できるものではありません。この地の開発は平成10年に基本計画ができ、そこからオガールプロジェクトの推進するため町長は、壊れたテープレコーダーとご自身で言いながら、住民へ計画の将来性を専門家の調査結果を踏まえ、何度も何度も繰り返し説明をされたと言いました。そのような中で本当に住民がひとつになりまちづくりに魂を込めた結果がオガールプロジェクトを成功に導いたものと考えます。

今回、遠方への先進地視察であり、交通費など参加者の自費負担も多くなりましたが、大変学ぶことが多い、意義ある視察となったことを強く感じているところです。

なお、詳細な研修内容等については議会事務局にございますので、ご一読いただければ幸いです。

最後に今回の視察研修にあたり、オガール紫波株式会社取締役小重嶋雄光様、武田議長はじめ紫波町議会の皆様、また町の議会事務局をはじめ関係各位には大変お世話になりました。改めて御礼を申し上げ視察報告といたします。

産業建設委員会委員長 石井芳清